

ノサックの作品集 “Spirale”

香 月 恵 里

I

H. E. Nossack (1901-77) は1956年、『眠れぬ夜のロマン』と副題を付けられた作品『螺旋』Spirale, Roman einer schlaflosen Nacht を発表した。この作品は『螺旋Ⅰ』から『螺旋Ⅴ』まで5つの短・中編からなっている。これら5つの作品のなかでノサックは年齢も環境も異なる5人の男たちを語り手、あるいは主人公としてその内面を語らせている。彼等は一見、相互に何の関係もない人物たちのようではあるが、実は彼等をつなぐ一本の糸が存在すること、彼等の自己の核心にあるものは同じであることが読み進んでいくうちに明らかになる。

『螺旋Ⅰ一岸辺にて』Spirale I-Am Ufer の語り手は18歳になった少年である。この作品で問題となっているのは、個人としての人間と、母によって象徴される社会との対立であるが、ノサックは1947年に発表された『ネキアー生き残った音の報告』Nekyia-Bericht eines Überlebenden の最後の部分ですでにこの問題を扱っている⁽¹⁾。

超現実的手法で描かれる作品『ネキア』の語り手は、死と再生の間の国、即ち死の国まで旅し、そこで Urmutter とも言うべき女性に会う。彼のこの旅は、読者に作家の同時代人であるユンクの言う無意識への旅、あるいは無意識の最下部にある集合的無意識への旅を連想させる。ここで我々が知るのは、人類、あるいは西洋人が無意識に共有しているある物語であり、かつてギリシャの詩人たちによって語られてきたアガメムノン王一家の悲劇——不実な妻クリュタイムネストラ・母殺しの息子オレステス・彼の姉妹の物語——の変形であ

る。この物語はあたかも原型の如く、その後のノサックの作品のほとんどを貫く構図となっている。しかしここでノサックが試みているのは、母であるクリュタイムネストラの側からこの物語を読み直すことである。ここでの彼女は夫の始めた戦争から自分と子供たちを守ろうとする普通の女性であり、一方アガムノンは名誉という幻想のために家族を犠牲にする冷血漢である。ノサックはこうした手法によって読者の固定観念をかきまぜ事物に新しい光を投げかけて真実に近付こうとするのである。

ノサックはおそらくここで、歴史の始まりというものを一つの寓話によって説明しようとしていると思われる。王は自分の始めた戦争のために子供たちを利用しようとする。息子自身はそれに気付いていないがここで彼は戦争の道具となり、自己疎外へと追いやられるのである。社会は個人に対し、この場合は兵士として奉仕することを要求する。母はそれに対して反抗するのであるが、この不幸な個人と社会との対立は実は彼女に原因があったのである。最初「横になった」——ただ存在するだけの——状態に飽き足らず、焦燥にかられた彼女は「立ち上がる」ことに憧れ、自分の代わりにまっすぐに立ち上がる夫を必要とする。そして夫のために一人の息子を生み出す。ここに登場する原初の母は、人間を生み出した自然、あるいは変化を予感して認識の木の実を食べよう良人をそそのかすイブのような存在である。「もしそんなことを考えなかったら、全て元のままだったのに」と彼女は後悔する。

こうして人間は自然の楽園から人間存在の中へと放り出され、歴史が始まる。自然から追放された人間は第二の自然としての制度を発明する。歴史の段階が進むにつれてそれら制度はますます巨大化し、緻密になり、かつて人間によって作られ人間に奉仕するはずのものだったのに、逆に人間に奉仕と服従を要求するようになる。そこでの個人は具体性を欠き、ひとまとめにされて制度による操作の対象と化す⁹⁾。ノサックの時代——つまり今世紀——人間を取り巻く諸制度は余りにも巨大でその網の目はあまりにも緻密なので、それ自体一つの世界となり人々はそれこそ現実そのものだと考えている。

『岸辺にて』では『ネキア』の寓話はさらに形を変えて演じられる。ここで

息子を自己疎外へと追いやろうとするのは母の方であって、彼女は人間を支配しようとする社会機構の具現者、「母権的怪物」ein matriarchaisches Monstrum⁽⁴⁾である。語り手の一家は大きな川の、代々母方から伝えられてきた古い家に住む。人々は船に乗ってその傍らを通り過ぎて行く。父親はノサックの大抵の作品においてそうであるように、諦観をもって自分と家族の人生を眺めており、積極的な行動をしない。この母は子豚の飼育に長け、食肉業者である彼女の弟（異母弟？）がその肉を売り歩いている。少年はまだ母が扱う一家の経済には組み入れられてはいない。しかし、川のこちらがわの母の家に留まる限り、いずれも意志に反して母たちの商売に加担しなくてはならない。彼の姉は商売に有利になるようにと俗物の税関吏と結婚させられ、不似合いな結婚によって生気を失っている。18歳になり、力も強くなった彼はある日、母とその弟が「あの子も一人前の男になるな」と言うのを偶然聞いてしまう。母たちは彼らの子豚を見るのと同じ目で少年をも見ているのである。少年は母たちの家畜となることから逃れようと計画し、大きな川の向こう岸に渡ろうとする。

こちらの岸辺では母は金のために子豚を育て、それが大きくなれば売らなくてはならず、姉は税関吏と有利な結婚をしなくてはならず、少年は大きくなれば母を手伝い、一家に貢献しなくてはならない。子供たちはそれ自身が目的のではなく、母の司る経済の手段として扱われる。少年が向こう岸に引かれるのは、そこが全く別の前提によって立つ世界のように思えるからである。かつてはそことこちらとを結ぶ橋があって、人々は二つの世界を自由に行き来していたのである。今、その橋は途中で壊れ、向こう岸について口にする人もいない。『岸辺にて』の少年を始め『螺旋』の人物たちが試みているのは、彼等には疑似現実としか思えない、母たちによって監視される世界を逃走してもう一つの世界へと到ることである。このもう一つの世界は、各作品中で「禁じられた岸辺」Verbotenes Ufer, 「外側」Außerhalb, 「保険不可能な世界」Nicht-Versicherbares,あるいは前人未到の極地として象徴されている。

ノサックがこのもう一つの世界を垣間見たのは第二次世界大戦中から戦後にかけてであった。彼は空襲によって廃墟と化したハンブルクで、制度が完全に

崩壊し、虚無と化した世界を見た。そしてその虚無のなかで事物と人間の本当の顔を見たこと、その虚無だけが救われる見込みのある人間に残された唯一の希望の地である事を彼は確信する⁽⁴⁾。ハンプルクの空襲はノサックにとって疑似現実という脆いガラスの覆いに差した暗い影であった。ハンプルクの没落がノサックの原点であるというのは、「普通に事実と言われているもの、法廷や実業家の間で重きを置かれているもの、要するに我々の社会的秩序に何らかの意味で数えられているもの⁽⁵⁾」が消失した後、言葉による二分法によって成立する社会機構の網の間をすり抜けていたものの存在を、作家が他の罹災者と共に体験したからに他ならない。通常、人はこういった体験を自分の人生には属さない一時の例外的状況と考え、それを速やかに忘れる。しかしノサックはこの体験を忘れることはなかった。彼には偽物としか思えなかった戦前の伝統的ヨーロッパの崩壊の後、新しいものが生まれてくることをノサックは期待する。1947年に発表された作品『没落』Der Untergang がハンプルク空襲の悲惨とその後の被災者の苦しみを描きながらも、読む者に希望を感じさせるのはこのためである。

しかし結局彼の期待は裏切られる。人々は虚無に耐えられず、すでに一度無効と宣言されたもので再び空虚を埋めようと試みる。『螺旋』の延長上にある後の長編『弟』Der Jüngere Bruder (1961) の冒頭で10年ぶりに戦後ヨーロッパに帰還する語り手シュナイダーを襲う幻滅はそのまま作家ノサックの幻滅である。『螺旋』の語り手たちもまた母たちによって監視される制度のなかで、社会機構の一部となり、その役割を果たすよう強いられている。彼等の内なる衝動はそこでの生が彼等本来のものでないことに気付いている。そして自分たち自身の方向を捜して、外側へと出発する。

ノサックのこの作品を考える場合、見逃せないのは、H. v. Kleist の事である⁽⁶⁾。彼はノサックにとって、文学上の「兄」のような存在であった。クライストはその論文 Über das Marionettentheater (1810) で、偶然、鏡の中に自分の優美な姿を発見した青年について述べている。彼はもう一度それを再現しようと鏡にむかってなんども試みるのであるが、その動作は一層ぎこちないも

のとなるだけである。自意識をもった人間はもうけっして無意識のなかにある自然さを享受することはできない。鏡に向かってポーズを試みる青年は、無意識のまどろみから引き出され、外部世界という鏡に写った自分を眺める人間である。それは彼自身には違いないのであるが、その鏡は彼を厳密に再現しているわけではない。彼は自身と鏡像の自分に違和感を抱くが、自然であろうとすればするほど鏡像は本来あるはずの自分から離れてしまう。クライストはこう言っている。

「そのような不協和音は、(…)我々が認識の木の実を食べて以来避けがたいものだ。しかし樂園には門が掛けられており、ケルビムは我々の背後にいる。」

すでに自意識を持ち、樂園を追われた人間はもはや動物のような自他一体の境地にはない。しかしノサックの人物たちは鏡像を自分自身であると感じることもできないというジレンマに陥っている。このような人間はどんな道が残っているのだろうか。クライストは続けてこう言う。

「我々は世界を一周する旅をしなくてはならない。そしてどこか後ろに再び開いている所はないか見なくてはならない⁽⁹⁾。」

クライストの「弟」であるノサックは彼の語り手たちを、「世界を一周する旅」へと送る。彼等は死と生の間の国から、人間存在の矛盾の中へ投げ込まれるのである。

II

『岸边にて』で彼岸へと出発した少年は『螺旋Ⅱ一配電盤』では青年になっ

ている。ここには語り手「私」である21歳の元学生と、「私」を訪ねてくるシュナイダーとが登場する。この二人には作者自身が大きく投影されている。成年に達すると同時に父からの送金を断って労働者となり、市民社会に背を向ける「私」の決断はそのまま青年ノサックの経験だった。「私」はノサック同様、その決断によって、孤独と餓死寸前の大変な貧困に苦しむことになる。彼は住み慣れた土地を離れて、未知の世界へと思い切って飛んだのではあったが、そこには固い地面はなかったのである。この「私」の前に不意に現れる年上の学生シュナイダーの奇妙な処世術や彼の自己を完全に隠匿した生活は、ナチス時代にやむなく実直な商人の仮面を被りゲシュタポの目を逃れなければならなかった作家自身の経歴を思わせる。かれら二人は正反対の人物のようにみえるが、実は同一人物であり、「私」を訪れるシュナイダーの長い独白も、「私」の行う自分自身との対話であろう。これによって「私」の存在の量は治まるのである。

後に『弟』中に語り手として登場する同名の語り手シュテファン・シュナイダーは『配電盤』のシュナイダーと同一人物と考えられる。彼等はともに少年時代に大変な幻滅を経験し、自殺の一手手前にまで追い込まれ、生きるために、自己を欺くという自殺のもう一つの形態を選択したと言う。『弟』は、中年になったシュナイダーがいかにして自分の偽装としての人生の決着を付けたかという『配電盤』の続きである。

シュナイダーの幻滅の始まりは、彼の兄の変容であった。かつて彼と兄は仲間であった。二人は母の目を盗んで将来の夢について語り合う。他に類のない独自の人間になってやろうと二人は夢見る。そのイメージは既に彼等の内にある。しかし兄は成長するにつれて寡黙になり、母の理想通りの大人への道を歩くようになる。シュナイダーが16歳のある日、家族に反抗的な振舞をした彼の所へ、母たちによって差し向けられた兄がやって来て説教を始める。兄の海綿のような鼻、だらりと下がった唇、生気の無い頬、人の良いばやけた目に激しい嫌悪を感じたシュナイダーは家を飛び出し、ある決心をして搾油池の周囲を回るが、結局家に戻り、父母に謝り、その後は別人のように「良い子」に変身

してまわりを驚かせる。この事件について『配電盤』には詳しくは書かれていないが、これがシュナイダーの自己にとって大きな危機だったことは、『弟』中に詳しい。

「(……) 復讐の為に多くの人は自殺するが、その代わり当時私は、どこからかは分からないが、世間を欺く為に偽装するという更に殺人的な方法を選択する力を見つけてきたのだった。母の女性的なくらげの触手によってさんざんいじりまわされてきた弱い自己に向かって私は言った。あっちへいけ！ おまえなんかむしろあそこの搾油地で溺れ死んでしまえ、そして僕の前に二度と姿をあらわすな。なぜってさもないと僕はおまえを弁護するために憤慨して、なにもかも駄目にしてしまうから。そうやって私はこの小さな植物を引っこ抜き、遠くの闇に投げ捨てた。しかし私自身は家に帰り言った。あなたたち、僕をどうしたいんですか？ここに僕はいますよ。(…)⁽⁸⁾。」

『配電盤』のシュナイダーは「前歴史的な臍帯」prähistorische Nabelschnur について語る。全ての人間は一度は中心から外へと向かおうと試みる。しかしその身体にはこの目に見えない臍帯が巻き付いていて、彼等が達することができるのはその円周上までなのである⁽⁹⁾。シュナイダーの兄はその限界に達し、まるで自由意思でそうしたかのように円周内へと帰ってきた。シュナイダー自身が選んだ方法は、彼の「像」や「名前」——即ち「私がそうだと思われているもの」——と、自己——それは「私の沈黙」という言葉で表されている——との分裂を計ることであった。そしてそのために「配電盤システム」Schalttafelsystem なるものを発明する。そうして自己の衝動を締め出し ausschalten 自分を外界に合わせ einrichten 自分を調節 ausrichten する。

16歳でこの「配電盤システム」を採用した時の事をシュナイダーは、「紙一重の所だった」es stand auf des Messers Schneide と言う⁽¹⁰⁾。彼は制度が自分たちに求める事を「去勢」Entmannen と名付け、兄をいわば「ちっぽけな男たちの為の暖かい豚小屋⁽¹¹⁾」に住む家畜のような存在と考えているものの、

シュナイダーの処世術はこの忌むべき兄のそれにそっくりなのである。そこでシュナイダーは常に刃の上を歩いているかのような緊張を強いられる。少しでも気を緩めれば外界は彼を飲み込み、消化し、本当に兄と同じ人間にしてしまうのであろう。彼のいる場所は分水嶺のような場所である。後に『弟』で、金持ちの母の奴隷となった、実直な数学教師として再登場する兄も、またその個人的意見の欠如でシュナイダーを驚嘆させる、大企業の欠くべからざる社長秘書シュトリンクも、シュナイダーの、そうなりうる可能性の一部であり、些細なききっかけで交換可能な自己の一部なのである。

『配電盤』のシュナイダーは今のところ、自分の今の生が偽りであると自覚している。しかし「(死者の) 仮面が骨にまで染み通り、死者を演じているうちに本当に死んでしまうという危険がある⁸⁸⁾。」螺旋の段階が『螺旋Ⅳ—恩赦』Spirale Ⅳ—Die Bagnadigung にまで進むと囚人となっている語り手「私」は看守と規則によって守られた牢獄以外の生を知らない。彼はある日、鏡に写った自分の顔が毎晩彼を悩ます苦悩を写すこともなく落ち着いて微笑んでいるのに気付いて愕然とするのである。

Ⅲ

『螺旋Ⅲ—不可能な証拠調べ』Unmögliche Beweisaufnahme では語り手「私」は39歳の成功した保険業者となっている。前作に登場したシュナイダーが自身に課したカムフラージュの期間は過ぎた。「非の打ち所のない」市民生活を送ってきた保険業者はある日、いよいよ「外側」へ出発すべき時が来た事を妻の態度によって知らされる。

彼は保険業者としての自分の役割を徹底的に偽装と意識することによって制度に基づくこの現実には属することを拒否している、言わば世外の人間であるが、『岸边にて』の少年が望んだ彼岸に達するために出発はしない。彼は二重の死者であり、そのため、他の人から「空気のない空隙」Luftleerer Zwischenraum で隔てられていると感じる。これは彼が言う様に、一種の執行猶予期間

である。

ノサックが『ネキア』で生と死の境界に身を置き、破壊のあとの新たな開始に希望を持ったのは戦時下から戦後すぐの時代であった。しかし、1948年に発表された『死神とのインタビュー』Interview mit dem Tode では作家N氏が会見する死神はもはや大鎌を手にした骸骨ではなく、近代的な工場の若社長である。人々はきちんと列を作って彼の工場の前で自分の番を待っている。今日の社会では死はもはや個人の一回切りの運命などではなく、保険と病院が扱う仕事の一つにおとしめられているのだ。そこですることがない死神は退屈し、彼の妹（5月の精らしき女性）は安っぽい衣装とイミテーションの装身具を身に付け、夜遅くまで遊び歩いている。戦後の復興が遂げられた後、人々の生は死から遠ざかると同時に陳腐な物に墮してしまった。そこにあるのはもう一つの死である。保険業者が語る、彼と妻との十年一日の変化のない生活は、保険によって守られた現代人の生を気分転換や娯楽を剥ぎ取った形で露呈してみせる。それは夫妻が毎夜行うトランプのペイシャンスゲームに似た、結論のない、意味の無い繰り返しである。一切は空しく、一切は眩惑にすぎない。

それゆえ、彼が妻と共に行った「保険不可能な世界への出発」とは、法廷が疑う様に死への旅立ちではない。それはむしろ、保険業者も言うように、生の中に出発することであった。彼等は保険が与える一般的安全を捨てて、運命の中へ飛び込もうとしたのである。

「(…) よし、行こう！行こう！何が起こると言うのだ。何も私達にこれ以上手を出すことはできない。私達はどこへでも望む場所へ行けるのだ。汚辱の中へ、悲惨の中へ、悪徳の中へ。人は私達を侮辱し、飢え死にさせ、嘲り笑い、切り刻み、刑務所へ送ればいい。(…)⁶⁰」

家を出た彼等の眼前に広がる氷結した湖のような大地、文目もつかぬ暗闇、猛烈な寒さは、法廷が拠って立つ基準である論理と計算の外側にあるもの、あるいはそこからこぼれ落ちた物の象徴である。おそらくそこでなら、人は他

の誰かのようなモデルケースとしての人生ではなく、この世に生まれて来た最初の人間の様に一度切りの運命を生きることができるのであろう。その世界の美しさに保険業者は息を飲む。しかし彼はそれに耐え得る程に成熟していなかったのであるが。そこは非現実、言葉の不在、緻密に張り巡らされた制度の網の目の中の、わずかな、そして一瞬の間隙といった否定のみで輪郭が知られ得る場所である。よって法廷に、言葉が無価値にするこの世界の事を言葉で語ろうとする保険業者の試みは「論理の外にあるものを論理によって再構築しようという⁶⁴」不毛な行為であり、この物語は途中で突然に中断されるしかない。

『螺旋V一碑』Spirale-V Das Mal でも語り手が目指す場所は雪と氷に閉ざされた場所である。5人の探検家たちが極点に到達しようと試みている。しかし、物語の始めに彼等の計画の挫折は明らかにされている。前人未到のはずの雪原上に彼等探検家が発見したのは、立ったまま凍死した男の姿だった。彼等は脱出を計った最初の人間などではなかったのだ。このことは彼等の冒険の失敗を意味している。それから先へ進むことは食糧の関係でできない。帰郷は不可能だと言い張る「私」に対して科学者の プレーズは言う。「誰が帰郷なんて言っているんだ。私が言うのは破滅の事だ。⁶⁵」そして「私」は「他の人々の迷惑にならずに破滅者の人生を送ることができる地点まで引き返す⁶⁶」事を決意する。

この物語で読者の注意を引くのは、雪原に立つ凍死者の表情である。彼は彼が到達できなかった雪原の先の方に向かって微笑み、その表情は「あるべき様子」をした風景の様である。ノサックはこの凍死者の中にクライストを描いているのだと ヨーゼフ・クラウスの指摘がある。ノサックには „Kleists Totenmaske⁶⁷” と題する詩もある。ノサックがこの凍死者でかれの想像するクライストの最後を表しているとすれば、この凍死者は「世界を巡る旅」を終え、ついに「後ろから、楽園に再びたどり着き」彼の「歴史の最終段階」をここで迎えたのだろうか。しかし『螺旋』の語り手にはこの作品内ではまだ終末は与えられていない。彼の「世界を巡る旅」はむなしく螺旋を描き、彼は他の4人の探検家とともに元の場所に戻る。

この語り手は後の長編『弟』に、シュナイダーと言う名前で再登場する。ヨーロッパから地球の反対側の場所の南米へと逃走した彼はそこで空しく10年を過ごした後、再び元の場所へ戻ってくる。そこでようやく彼に終末が与えられる。長い間、大変な焦燥と共に捜していたものを思いがけない形で発見した彼は、そのときようやく自分自身と一体になり、彼の人生の最終段階を迎えるのである。

注 香月恵里

- (1) H. E. Nossack : Nekyia, Bericht eines Überlebenden, Suhrkamp Verlag, 1964. S. 132f.
- (2) H. E. N. : Die Schwache Position der Literatur, Reden und Aussätze, edition suhrkamp 156, 1981. „So lebte er hin...“, S. 58.
- (3) Joseph Kraus : Hans E. Nossack, Verlag C.H. Beck, Autorenbücher 27, Herausgegeben von Heinz Ludwig Arnord und Ernst-Peter Wickenberg, 1981, S. 57.
- (4) Vgl. H. E. N. : Interview mit dem Tode, Bibliothek Suhrkamp 117, 1980. „Der Untergang“.
- (5) H. E. N. : Interview mit dem Tode, „Klonz“, S. 180.
- (6) J. Kraus : Hans E. Nossack, S. 70.
- (7) Heinrich von Kleist Sämtlich Werke und Briefe, in vier Bänden, Band 3, S. 555f.
- (8) H. E. N. : Der jüngere Bruder, suhrkamp taschenbuch 133 1961. S. 215.
- (9) H. E. N. : Spirale, Roman einer schlaflosen Nacht, suhrkamp taschenbuch 50, 1972. „Die Schalttafel“, S. 69.
- (10) ebd. S. 67.
- (11) ebd. S. 85.
- (12) ebd. S. 82.
- (13) H. E. N. : Spirale, „Unmögliche Beweisaufnahme“, S. 198.
- (14) ebd. S. 213.
- (15) H. E. N. : Spirale, „Das Mal“, S. 292.
- (16) ebd. S. 293.
- (17) H. E. N. : Dieser Andere, Ein Lesebuch mit Briefen, Gedichten, Prosa, Suhrkamp Verlag, 1976. „Kleists Totenmaske“, S. 110.